

複合文化学通信

第9号 (2007年6月12日発行)

早稲田大学 教育・総合科学学術院 教育学部

複合文化学科「複合文化学通信」編集部

(編集責任 / 福田育弘 編集補佐 / 古川誠之)

みなさん、複合文化学科の授業はいかがですか？

期待通り、期待はずれ、
こんなんあり、こんなもんか
といろいろな意見があると思います。
というわけで、
今回から、各授業での教員の感想や
場合によってはみなさんの意見を
載せていきます。

今後授業に関して何か意見や要望があれば、編集室 (culture@edu.waseda.ac.jp) までメールを
ください。個別にお答えするほか、「通信」でも紹介します。

匿名希望の場合は、「匿名希望」としてください。

また、そうした意見や要望を出されたことで、本人が不利益になることのないよう配慮します。

こんな授業、あんな科目

まずは、基幹となる必修科目「複合文化学の建築物」
についてです。

すべての「建築物」が、あるテーマ系に関する3人
の教員のリレー講義で行われます。

複合文化学の建築物 I

知覚のメタモルフォーゼ

(月曜3限)

わたしがトップバッターになった「建築物 I」の授
業に関して、Course N@vi に寄せられたみなさんの意
見を中心に紹介したいと思います。このような記名の

感想が、しばしば授業者である教師への「媚び」があ
ることを差し引いても、一定の評価であると思うから
です。すこし長くなりますが、**なるべく多くの意見を
紹介**します。

まず、なぜはじめに味覚と飲食であるかという点に
ついての意見です。

「食という身近なことがこんなにも意味深いものであ
ることに驚いた。食事という当たり前のこととしてお
こなわれている行為は無意識のうちにしていることが

まだまだたくさんあると思う。もっと意識を働かせていれば、日常で気がつくことがたくさんあるということにこの講義を受けて気づかされました。」

「最初、味覚を研究するって一体どういうことだろう？と思ったのですが、こんなに色んな視点から物事って捉えられるのだなと驚きました。当然だと思っていたことに改めて気づく事も多かったです。」

「大学に入って、コンパなどによく行くことで、食事に触れることが多く、この授業は「なるほど」と共感できることが多かった。なんか大学っぽい授業という感じで、自分が今まで想像していた、大学の授業という感じでした。それは、食事という高校ではまったく扱われない専門的な内容であったし、福田先生の訴えるような講義がそう思わせただと思えます。」

「大学最初の授業がこの授業でした。飲食行為が学問になるのか！という驚きは、よく考えたらよく分からない複合文化学科という学科に入学してしまった自分にとって新鮮だけどとっつきやすく、一番最初の講義としてはとても良いものだったと思います。初めからやたら難しい講義をされてはやる気もなくなりますし。」

最後の意見の後半部分は、良くいえば研究者的な、悪くいえば自己満足的な授業を展開しがちなわたしたち教員が、よく肝に銘じておかねばならないことがらかと思えます。

当初の意見では、「複合文化学ってなに？」とか、「建築物ってどういう意味」といった感想がみられましたが、回が進むうちに、この授業の意図、この授業がなぜ複合文化学科の1年の最初の必修に置かれているかを理解するような意見が増えていきました。

「先生の、「食」という文化に対して授業の名前通り「複合」的な視点から解説する講義は、とても面白いものでした。宗教から現代文化まで幅広くそして深い知識がないと、こんなに、多面的に考察することはできないなと思いました。高校で何も文化的な授業を受けてこなかったので少し内容が難しく感じられました。けれども、授業は自分たちにも身近な事象も取り上げていただけたので、難解なことも少し理解することができて有意義なものにすることができました。」

「昔の外国の食事風景などの絵がないとあまりイメージが沸かない話から、『アンパンマン』など自分たちの世代にはよく知られた題材を使つての話など、幅広い角度から食文化を見る事が出来、ある程度複合文化学的な

考え方がわかってきたような気がします。」

「これが初めて受講した「複合文化学」の講義なのですが、4回の講義を受け、なるほどこれが複合文化学なのかというのが徐々にわかってきた気がします。全く違う先生による違うテーマの講義でも、どこかで福田先生の話とリンクしている部分があったりして、なかなか面白かったです。」

「人間の欲求の一つである「食」について、多くの視点から見る事ができて面白かった。

アプローチや国、時代といった様々な視点から「食」を見ることで、食の日本文化が確立されたように思う。最初の「複合文化学とは何か」の説明では、そんな簡単に多角的に見ると言われても…と思っていたが、それは決して難しいことではないのかもしれないと思った。今回の授業はあくまで今後の参考として、これからは自分で多くの視点を見つけるようにしたいと思った。」

これらの意見をまとめたような内容の意見もあります。

「わたしは、複合文化学の建築学という講義名とガイダンスに惹かれてこの講義を受講したのですが、最初はどうに授業が展開されるのかは、わかっていませんでした。講義を毎週受けるうちに、だんだん方向性が見えてきて、講義自体、学問ということ抜きにしても、教養と雑学としても非常に興味を持って受講することができました。高校までの暗記中心の授業と違い、理解し教養を深めて、物事への関心を高めるとというのが大学の授業なんだという自分なりのイメージが、この講義を通して見えてきました。」

ただし、つぎのような複合文化学的多面的なアプローチの問題を指摘する意見もありました。

「飲食という一見単純な行為を多面的に深く考えていくと、複雑であり、いろんな思いもしなかったようなものが見えてきたりするので授業がすすむにつれてどんどん知りたいという意欲がわいてきた。なにごとにおいても多面的に考えることを大切にしていきたいと思った。ただ多面的な分、何がつかめたのかがわからなくなるのが問題だと思うので、そこからどういったことを見出したいのかは忘れずにいかなければならない。実際、この授業でも自分なりにつかめたことがまだ明確でないのもう1回考えて何かをつかもうと思っている。」

また、内容を盛り込み過ぎであるとの意見もありました。

「これだけ短い時間にできるだけ「多面的」に見ようとするのは、やはりなかなか難しいと感じました。もっと時間があればいいのか、もっと焦点をしぼるべきなのか、かなり前のめりで聴いていないと聞き流してしまう人も多そうだな、(最初から聞く気のない人は別として)というのが正直な感想です。先生の急ぐ感じにこちらも急かされる時があります。

後やはり教室に対して人数がとても多いのも一つの問題かもしれませんね。なんだかこの授業は教室が異様な雰囲気な気がします。バーゲン会場みたいな…。

しかしながら「色んな視点から見る」「複合的に考える」ことは、普段でも、ものごとを考えるときに大事な基本的なことだと思います。しかしその作業が自然にできるようになるには訓練が必要だとも思います。ですからこの新しい授業でやろうとしているだろうことは、私はすごく賛成できるし勉強になるので、この新しい授業、これから参加したいという気にますますなりました。」

これは、この授業の基本コンセプトへの批判ではなく、各教員の授業の内容の選択と進め方、教室環境の問題で考えていますが、どうでしょうか？

また、すでに上の意見にあるように、初回から教室環境の悪さ（219名の受講生に対して収容人数ギリギリの縦長の教室）の改善を求める声がいくつかみられました。ガイダンスもふくむ福田が行った5回の講義全体に対する意見でも、それが繰り返されました。これについては、現在の教室不足と、なるべく多くの履修希望を満たすための措置だったことを、Course N@viにも書き、授業でも説明しましたが、やはりあまりに大人数のため、なるべくあちこち移動して授業したにもかかわらず、うしろで私語が多い等の不満がみられました。これは、来年に向けて大いに反省し、改善すべき点だと考えています。

「ただ教室の環境がそこまでよくないので残念だと思います。」

「内容以外でいうと、やっぱり教室は狭いし、私語がかなり気になりました。」

「ほとんど最前列近くで授業を受けていたのですが、初めに席が無くて後ろで受けざるを得なかった時に後ろの二年生以上の学生の私語と授業態度が悪すぎて閉口し

てしまいました。もう少し人数を絞り（人気講座なのは承知の上です！！）、受講者全員が集中できる環境を作ったほうがいいのでは？ と思います。」

(福田 育弘)

複合文化学の建築物 II

他者たちのシーン

(木曜3限)

「他者」をテーマにした3人の教員のリレー講義です。複合文化学科は具体的な事例から出発することを教育の方法としているので、私は「他者」とはなんぞやという抽象的な議論から入らずに、「他者」との戦いの具体的な事例である「感染」や「免疫」をとりあげました。

とはいっても、生物学や医学や細菌学の授業ではありませんから、「他者」が「私」を変質させたり、「私」が「他者」を拒絶したりする作用を、ひろく「感染」ないし「免疫」ととらえました。

授業では、マンガや映画を素材にしました。まず素材が書物ではなかった点で、学生には新鮮にうつったようです。しかし、授業でマンガや映画をとりあげるだけで学生の関心をひきつけておける古き良き時代は終わりました。ですから、授業ではそれらの素材にまったく別の角度から光をあてる必要があります。手前味噌になりますが、比較的新鮮な素材をとりあげたこととならんで、切り口の新鮮さでも学生からはポジティブな反応をもらうことができました。

上で述べたように、複合文化学科は具体的な事例から出発することを教育の方法にしていますが、このことは、複合文化学科の授業が、学生や教員の足下にある（「アクチュアル」などと言ってもいいかもしれません）現象を扱うということにあらわれています。それは、日常生活の奥行きをながめてみるということです。

「感染」や「免疫」を扱った私の4回の担当回が終了した直後、お約束されていたかのように、私たちの足下で「感染」がひろがり、多くの人は「免疫」によって難を逃れることができました。麻疹による休講は一週間以上続きました。

私の担当回のレポート締切はちょうど一昨日（6月10日）だったのですが、提出されたレポートのなかには、この麻疹という狭義の「感染」と、噂という広義の「感染」とが同じ仕組みをもっていることに着目したものがありました。このレポートには、少なくとも方法のうえでは合格点を与えることができそうです。

最後に、私がバトンを渡した教員が伝えてくれた学生からの鋭い質問をご紹介します。教員間のテーマにはど

のような関連性があるのか、という質問でした。

「複合文化学の建築物Ⅱ」を担当する3人の教員は、「他者たちのシーンー他人と他者ってどう違うの?」という共通のテーマを、それぞれ異なるフィールドで考察することになっています。フィールドの相違が、私ともう1人の教員の授業が不連続であるかのような印象を引き起こしたのでしょう。

共通のテーマを異なったフィールドで考察するという複合性が、学生の皆さんに船酔いをもたらしたのかもしれない。その意味で、質問者が違和感をいだいたことは、質問者が授業をしっかりフォローしていたことのあかしになっています。ご安心ください。

(神尾 達之)

つづいて、同じく1年次の必修科目である「複合文化学の開拓地」についてです。

この科目も、みなさんが新たな領域を発見するため、専門のこととなる教員のリレー講義によって進行します。

複合文化学の開拓地Ⅲ

金曜2限

「複合文化学の開拓地Ⅲ」は、メディア表象論の基礎をあつかう講義で、3人の教員による輪番制をとっています。

トップバッターとして原が担当しました。現在は藤井、最後は伊藤の各先生が担当します。3人ともそれぞれ独自のメディア研究を展開していますが、各教員ともマクルーハンのメディア論から、いかに批判的な距離を保てるかという点に研究の力点を置いています。

今回ボクは、情報伝達の枠組みとしてのメディア環境の分析と、ディスクール(フォーコー)の分析との理論的接点を明らかにする必要性を概説として紹介しました。メディアロジー的展開の必要性です。

とりわけ1年生にとっては、はじめて聞く概念や思想家の名前が出てきたことでしょうか、いずれも今後大学4年間における勉学・研究の理論的プラットフォームを形成してくれるものばかりですので、この時期に接しておくことが必要と判断しました。

この講義は、いわば種時きの作業にあたるようなもので、3人の講師陣とも、今後みなさんの努力により大きく花開くことを期待します。

(原 克)

さて、演習科目「複合文化学テーマ演習」です。

1年からの専門ゼミ、これも複合文化学科の特色ですが、そこでは、なんに関する発表が行われ、どんな議論がおこなわれているのでしょうか?

複合文化学テーマ演習Ⅰ5

この絵は美しいか?(美術作品を感じて考えよう)

木曜4限

新学科で美術に関心ある人がどのくらいいるだろうと半信半疑で授業を始めました。案の定少人数クラスでしたが、中に結構美術の好きな人がいたこともあって、楽しく授業を進めることができました。

皆が選ぶのはどうせ近代の画家たちだろうと思っていましたが、蓋を開けてみると、意外と昔の大画家も出てきました。

おかげで、いきなりフェルメールやボッティチェリに関する「寓意」の問題や、あるいは晩年のレンブラントを通じて、芸術家の生き方などについて皆で考えることができ、ずいぶん驚きました。(寓意などの問題は、図像学を扱う2年生以降の授業でもっと学ぶことができます。)

近代の画家では、モネ(死んだ妻の面影について)、ゴッホ(歪んだ部屋について)、ゴーガン(印象派との違いとその東洋的な要素について)について興味深い発表がありました。

発表の後、皆が自分の主観的な印象について話すとき、かなりオリジナルな意見も出てきました。たいへん有意義だったと思っています。

アトリエで幼少時から修行し、最初から大画家になるべき道を歩んだ昔の大画家と異なり、これらの画家は今の私たちにずっと近い存在です。違いは、絵を描く行為の重要性が、現代においては限りなく弱まっていることです。美術にあまり馴染みがない、と思っている人が少なくないのもそのせいです。

しかしそのままでは寂しいです。そもそも、ある絵が好きか嫌いかという第一印象は重要ですが、これは年月とともに変化するものでもあります。その意味では、最初から美術に興味がなかった人も、実際に美術館に足を運んだり、書かれたものを読んだり、人の話を聞くことによって、少し気になっていた印象が徐々に強まり、あるときその絵が語りかけてきます。優れた作品はそのようなきっかけを与えてくれます。

この授業が、参加してくれた人にとってその糸口にでもなれば、と思っています。

(丸川 誠司)

複合文化学テーマ演習 I 3

金曜 3 限

新しい「複合文化学科」の授業。そして「複合文化学科」の初めての学生。

学校が始まって約 2 ヶ月が経ちましたが、教員にとっても学生にとっても、初めてのことバツカリ。お互いに期待も高いが、不安も大きい。

演習を教えるの率直の感想は「学生はとても優秀である」の一言に尽きます。

演習なので、学生が主体となる授業です。

「日本食はアジアで広まるか?」、「歴史問題で和解ができるか」、「海賊版は悪いのか」といったテーマ、そしてアジアに限定した内容で二人の学生が自分で調べてきて、それぞれ「YES」か「NO」か、違う立場に立って発表します。そのあと全員が参加して、議論し、ディベートしていく。

普通ならば大学 3 年生がやることなので、入学したばかりの大学 1 年生で大丈夫かな? とちょっと不安に思っていたのですが、1 回目から学生たちはパワーポイントを駆使して立派にプレゼンテーションをしてくれました。

まずは順調な出だしでしたが、教員にとっても学生にとってもチャレンジが続きます。

(青山 瑠妙)

複合文化学テーマ演習 I 4

日常のなかにあるさまざまな「差別」に気がついていきますか

木曜 4 限

テーマ演習が始まった。1 年生に外国語を教えることには慣れているが、演習（ゼミ）となるとまた勝手がちがう。私にとっても新鮮な経験である。

私の演習の副題は、「日常のなかにあるさまざまな「差別」に気がついていきますか」というもの。このかなり社会的なテーマ設定に対して、少なからぬ学生が興味を示してくれたのは喜ばしいことだ。とはいえ、演習のなかではそれほど大上段に振りかぶったことをしているわけでもない。むしろ、「これが差別となんの関係があるの?」と学生から質問が出るような教材（文庫・新書）も扱っている（たとえば、「萌える男」とかね）。日常の身近なことから学ぶことが大切だと考えているからだ。

テーマが日常的であればあるほど、私たちはだれもがそれについてなにがしかの「主張」を持っている。だから、ついそうした「主張」同士を、いきなり「ガチで」ぶつ

け合いたくなる。しかし、演習ですべきことはそれとはかなり異なる。

それぞれのテーマについて、まずはなんといっても、教材の「主張」に耳を傾けなければならない。そして、教材と自分の「主張」の距離をつかむ必要がある。教材との距離感を踏まえてはじめて、学生同士がそれぞれの「主張」の位置を計り直し、文字通り「詰めて」いく——これが演習で求められる議論のあり方だ。その結果、自分の「主張」が多少なりとも変化していることに気がつくだろう。この「変わる自分」に気がつくことが、じつはもっとも重要なのである。

もちろん、ひとはだれしも、そう簡単に「変わる自分」を発見できるわけではない。テーマ演習は、そのためのほんのささやかな「入り口」に過ぎない。「なかなか思ったように議論を展開することができない」という学生の声も聞く。でも、最初からうまくいなくてもいいじゃないか。大学生活の 4 年間は、まだ始まったばかりなのだから。

(後藤 雄介)

さいごに、情報系の必修科目です。

1 年からの情報系の科目の秩序だった履修、これも複合文化学科の大きな特徴です。

そこでの授業内容を紹介します。

ツールとしての情報通信ネットワーク I

月曜 4・5 限

「複合文化学通信 第 3 号（新年号）」では、この授業の目的を以下のように書きました。

「アカデミックな世界に共通する基礎的な技法や作法」を「情報化された知」をあつかいながら学んでいこう！高等教育機関である大学には、学術書、電子雑誌、データベースなど、いままでみなさんがたがアクセスすることが困難であった大量の「知」が蓄積されています。そして、それらを有効に扱うためには、情報機器やネットワークの取りあつかいを習得するとともに、アカデミックな世界に共通する基礎的な技法や作法を身につける必要があります。」

ですので、

「なんでこの授業では Word や Excel や PowerPoint の

使い方をやらないの？」

といわれるとちょっと困ってしまいます。

たしかに OS やソフトウェアの操作方法を全く知らなければ、道具として使えないので困りますが、特定の製品の細かい使い方に詳しくなってもしかたありません。そのような知識は細かい使い方バージョンが変わったりすると役に立たなくなるからです。

それよりもコンピュータを使っていろいろな方法で学術的に有効な情報を扱う訓練を繰り返すすめたほうが

効果的だと思っています。もちろんツールとして（とくに PowerPoint）は使いますので、それらを使いたい方ももうちょっと待ってください。

（楠元 範明）

fukugou-bunka@eiga

クレヨンしんちゃん 嵐を呼ぶ モーレツ！オトナ帝国の逆襲 2001 年 日本映画 原恵一監督

「クレヨンしんちゃん」みなさん観たことがありますか？

1990 年に『週刊マンガアクション』で連載が始まり、92 年からテレビアニメの放映、93 年に劇場アニメ第一作が公開されています。今年のゴールデンウィークに公開された「クレヨンしんちゃん 嵐を呼ぶ 歌うケツだけ爆弾！」はシリーズ第 15 作になります。

今回紹介するのは、この『複合文化学通信』第 9 号と奇しくも同じ、シリーズ第 9 作の《オトナ帝国の逆襲》。

舞台は「20 世紀博」というテーマパークが各地にできた 21 世紀初頭の日本。冒頭では、この「20 世紀博」で遊ぶ野原一家が描かれます。この部分だけなら、テレビアニメの「クレヨンしんちゃん」と同じです。「20 世紀博」、実は世界を 20 世紀（といっても 1970 年代）に逆戻りさせ、永遠に古き良き昭和の時代のままにしようという陰謀の拠点なのでした。

「明日、お迎えにあがります」という「20 世紀博」からのメッセージがテレビで流された翌日、オトナたちは迎えに来たオート三輪（20 世紀の象徴ともいえる三輪トラック）に乗って姿を消してしまいます。オトナたちは昭和の匂いとそれによってもたらされるノスタルジーにより、子どもに戻ってしまっていたのです。街には子どもたちだけが取り残されます。やがて、その子どもたちも一人また一人つかまえられていきます。怖いですねー。

しんちゃんとその仲間、勇気をふりしぼって、自分たちの父と母、そして自らの未来である 21 世紀を取り戻すべく「20 世紀博」に乗り込んでいきます。オトナたちを 21 世紀に取り戻すカギは何だったのか。それはやはり「匂い」でした。それも強烈な。何の匂いなのかはここには書かないでおきます。その匂いにより「今」を取り戻した野原一家は、陰謀を阻止すべく家族そろって戦い、勝利を収めます。そしてまた野原家の日常（テレビアニメで描かれている世界）に戻っていきます。

子ども向け映画の観衆は子どもだけではなく。幼稚園や小学校の子どもが一人だけで映画館に行くことはないですね。そこには子どもの数だけのオトナがいるわけです。もちろんお金を出すのもオトナです。この点を突いて、子ども向け映画のふりをして、見事なオトナ映画にしまっているのが、「クレヨンしんちゃん」シリーズなのです。

シリーズには傑作がいくつもあります。とりわけ第 4 作《ヘンダーランドの大冒険》、第 10 作《戦国大合戦》は味わい深いものがあります。小さい頃に映画館で観たことのある人も、いやそういう人こそ、もう一度「今」の目で観なおしてもらいたいものです。きっと全く別の新しい映画として目の前に現れるでしょう。（村上 公一）

第 10 号は 8 月 1 日 発行の予定です。

背景画像：イタリア、アッシジ市街 ©2007 I. Fukuda